

デフリンピック開催で進む社会全体のバリアフリー

さて、みなさんはデフリンピックということばをご存知でしたか？Deaf（聾）のオリンピックという意味です。近代オリンピックはフランスのクーベルタンが中心になって1896年にアテネで開催したのが始まりですが、そのことに刺激を受けた同じフランスのユージンという聾の自転車修理工がベルギー人のアントワヌという聾者と共同して、1924年に「聾啞スポーツ大会」を開催したのがデフリンピックの始まりとされています。この大会の大きな意義は、障害者自身が中心になって初めて国際スポーツ大会を開催したということです。パラリンピックの原型は1948年に始まりますから、四半世紀も昔のことなんですね。

私が指導した学生の中に2009年のデフリンピック台北大会の女子サッカーチームに帯同して、大会に参加する前後の選手自身の聴覚障害に対する考え方の変化を調べた学生がいます。その研究によると、いずれの選手も「聞こえない自分」というものを（以前は劣等感など感じていたが）大会を通じて肯定的にとらえられるようになり、手話を使うことや聞こえない仲間を作ることに積極的になることが示されました。「聞こえない自分」というものを受け入れて、堂々と戦う世界のアスリートに触発される部分が少なくなかったと考えます。台北大会の女子サッカーは残念ながらいい成績は残せませんでした。成績以上に各々が得たものは大きかったようです。

また、デフリンピックにはもう一つ大きな効果があるといわれています。大会中聞こえない人たちが街のあちこちにあふれるわけですから、ホテルマンにしてもタクシーの運転手にしても最初はとても戸惑うようです。それでも大会が終わるころには、カウンター越しに筆談をしたり地図を指さして確認したりと見てわかる方法でごく当たり前にコミュニケーションを行うようになります。また街を行き交う多くの人々が、アスリートたちに簡単な手話で挨拶をしてくれるようにもなるようです。大会が開催されるとその都市の心のバリアフリーが促進され、聞こえない人たちが過ごしやすい都市に変わっていく効果があるのです。きっと、イスタンブールでもその効果があったのではないのでしょうか。

2020年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催されます。東京パラリンピックでは、これまで対象に含めていなかった聴覚障害者（デフリンピック）や知的障害者（スペシャルオリンピックス）も一部の競技で参加することも検討されているようです。これを機会に障害者スポーツの輪が広がって、社会全体のバリアフリーが進むことを期待しています。